

聚楽第(聚楽亭、聚楽城)(京都市上京区堀川下立売北西周辺)

聚楽第(じゅらくだい)は、安土桃山時代、山城国京都の内野(平安京の大内裏跡、現在の京都府京都市上京区)に豊臣秀吉が建てた政庁兼邸宅である。なお当時の文献には単に「聚楽」、あるいはまれに「聚楽城」と現れる。竣工して8年後に取り壊されたため構造などについては不明な点が多い。

歴史

聚楽第は関白になった豊臣秀吉の政庁兼邸宅として1586年(天正14年)2月に着工され、翌1587年(天正15年)9月に完成した。

九州征伐を終えた秀吉が大坂より移り、ここで政務をみた。1588年5月9日(旧暦天正16年4月14日)には後陽成天皇の行幸を迎えてこれを饗応している。また天正少年使節や徳川家康の謁見もここで行われた。

1591年(天正19年)12月に秀吉が豊臣氏氏長者・家督および関白職を甥(姉・日秀の子、当時23歳)豊臣秀次に譲ったあとは、聚楽第は秀次の邸宅となった。翌、1592年(天正20年)1月には再度後陽成天皇の行幸を迎えている。短期間に同じ聚楽第に2度も行幸が行われたのは日本史上稀有なことである。また文禄3年ごろには北の丸が秀次により増築された。しかし、秀吉は1595年(文禄4年)7月に秀次を高野山に追放して切腹させ、秀次の居城であった聚楽第も翌8月以降、徹底的に破却した。なお、後に御所に参内するための利便上、新たに豊臣家の京屋敷を建設する必要に迫られ、現在の仙洞御所の地に「京都新城(後に北政所が居住)」が設けられた。

聚楽第の建造物の多くは伏見城内へ移築されたとされる。なお、西本願寺の飛雲閣、妙覚寺の大門、妙心寺播磨院玄関、山口県萩市常念寺の山門など聚楽第から移築されたという伝承がある建造物も少なくないが、いずれも伝承の域を出ず、今のところ研究者の間で聚楽第の遺構と認められている建造物は唯一2003年の修理の際に飾り金物から「天正」の銘が発見された大徳寺の唐門だけである。廃却後、聚楽第縁辺にあった聚楽町に住んでいた住民は町ごと伏見城下に移転させられたといわれ、現在も京都市伏見区には聚楽町の地名が残っている。同区内にはこのほか聚楽第ゆかりの「(東・西)朱雀町」「(上・下)神泉苑町」の地名が残る。

構造

聚楽第は、「第」(＝邸)とあるが、本丸を中心に、西の丸・南二の丸及び北の丸(豊臣秀次増築)の三つの曲輪を持ち、堀を巡らせた平城であった。建物には金箔瓦が用いられ、白壁の櫓や天守のような重層な建物を持つ姿が「聚楽第図屏風」や2004年に発見された「洛中洛外図」(江戸初期)などの絵図に描かれており、さらに国立国会図書館などが所蔵する「聚楽古城図」では本丸北西隅に「天守」の書き入れがあるので、天守の存在が推定されているが、一方で天守はなかったのではないかという指摘もある。内郭部の規模は、秀次の家臣駒井重勝の『駒井日記』に詳しく記されている。それによると本丸の石垣上の壁の延長は計486間、三つの曲輪も含めた四周に巡らされた柵の延長は計1031間であった。

近年内郭部堀跡を記した『京都図屏風(地図屏風)』(寛永初期成立)が発見されて内郭のおおよその位置が明らかになってきた。この図に従うと本丸は、北堀が一条通南方、東堀が大宮通、南堀は上長者町通、西堀は裏門通付近にあったものと推定され、それに加えて北之丸北堀は横神明通、南二之丸南堀は出水通北方、西之丸西堀は浄福寺通付近にあったものと推定される。『聚楽行幸記』や「聚楽古城図」などによれば外郭もあったとされ、これら記述から高垣(「石のついがき」(『行幸記』))が「山のごとく(同書)」四周を巡っていたものと推定される。この築垣は残存地名などから、北側は元誓願寺通付近、東側は黒門通付近、南側は下立売通と出水通との中間に築かれていたと考えられ、西側については東築垣の位置から類推して土屋町通付近にあったものと推定される。これが聚楽第の城域ということになる。なお「外郭は堀であった」との主張もある(下記「現状」参照)。

聚楽第の周辺地域には、秀吉麾下（きか）の大名屋敷を配置し、その範囲は、北は元誓願寺通、南は丸太町通、東は堀川、西は千本通で囲まれた地域であったと推測されている。のちに街区は堀川の東にも広げられ聚楽第と御所の間は金箔瓦を葺いた大名屋敷で埋め尽くされたと考えられている。大名屋敷のほかに、側近である千利休の屋敷（黒門通から猪熊通の元誓願寺下ル付近一帯と推測）もあった。

名称

聚楽第は聚楽亭（じゅらくてい）ともいわれるが、これらは江戸時代に入ってから呼び名で、秀吉当時の文献^[2]には単に「聚楽」と記す。^[3]。当時の古文書^[4]には聚楽城と記したものも見られるが、戦鬪を目的とした城（城郭）ではない。

聚楽第は、建造中は「内野御構」（うちの おかまい、-の おんかまえ）と呼ばれていたことが知られており、その初見は『多聞院日記』天正14年2月27日の条にある「去廿一日ヨリ内野御構普請」。「聚楽」の名が使われ始めるのは九州征伐から帰還した後のことである。

「聚楽」という名の由来については、秀吉が御伽衆の大村由己に書かせた『天正記』のひとつ『聚楽行幸記』に「長生不老の樂（うたまい）を聚（あつ）むるものなり」とある。またフロイスの『日本史』には「彼（秀吉）はこの城を聚楽と命名した。それは彼らの言葉で悦楽と歓喜の集合を意味する」（松田毅・川崎桃太訳）とある。これら以外に「聚楽」の出典が見いだせないことから、史家のあいだではこれが秀吉の造語によるものだとする見方が一般的となっている。

現状

『聚楽第址』の石碑 この石碑は、1992年（平成4年）の発掘調査で本丸東堀跡の遺構が見つかり大量の金箔瓦が出土した西陣公共職業安定所の北に建っている

聚楽第は現在では地形にわずかに痕跡をとどめる程度で、明確な遺構は残っていない。現在、中立売通大宮西北角（本丸東堀があったとされる地点【写真：右】）と中立売通裏門南西角（本丸西堀があったとされる地点）の2箇所に『聚楽第址』の石碑があり、聚楽第の在った位置をおおよそ知ることができる。

聚楽第の遺跡として「梅雨（つゆ）の井」（松屋町通下長者町上ル東入ル東堀町内）が挙げられるが、本地点は本丸東堀上に当たるので、聚楽第の遺構とするのは無理がある。

なお松林寺墓地にある広範囲の窪地やその北側にあった「天秤堀」が聚楽第の外堀跡であるとの説が天保年間に名倉希言により唱えられ、この説に依拠して「外濠」の存在を主張する埋蔵文化財調査関係者もいるが、試掘調査の結果、石垣・堀に伴うはずの堆積物層・金箔瓦などは一切発見されていない。その復元図に描かれる「外濠」は聚楽第南西方向に限られ、幅員、方向ともにまちまちで、外郭の全容を推測することが難しい。このため城郭史家からはこの「外濠」説への支持はない。また桃山期から江戸初期にかけての文献・資料・絵画いずれにも外堀のことは見えず、むしろそれらの資料は、外郭は「ついがき（築地堀）」であったことを示している。松林寺境内で行われた調査もごく小規模な試掘だから、周辺でよく検出される聚楽土の探掘跡との区別は明瞭でない。文献・資料面からは到底「外郭＝ついがき」説に対抗できないから、松林寺墓地の窪地を「外濠」跡と主張するためには、本格的発掘調査を行い、石垣基部や一定量の金箔瓦など決定的証拠を発見する必要がある。

京都市出水老人デイサービスセンターの北向かい（智恵光院通出水通下ル分銅町）に加藤清正寄贈という庭石も残るがこれも確証はない。

ただし、地名には、「須浜町」「須浜池町」「天秤丸町」「山里町」「北之御門町」「高台院（旧みだい）町」「東堀町」などなお当時の名残を色濃く残している。「黒門通」は聚楽第の東門（「くろがねの門」）にちなむとされ、また「藤五郎町」「如水町」「小寺町」「浮田町」「中村町」「飛弾殿町」「福島町」「中書町」「直家（旧なおゑ）町」など秀吉麾下（きか）の武将の名を冠した地名も多く見られる。なお南小大門町はもと「黒門町」、新白水丸町付近にはかつて「本丸町」があった。また「北之御門町」には明治まで聚楽北門の敷石などが残っていたとも伝える（『京都市町名変遷史』）。

堀川（京都府）の中立売橋（堀川第一橋ともいう）上流左岸に断続的に残る石垣は、比較的大きな自然石を野面積みしたもので、石を刳（く）った樋も見られるなど手法が古様なため、この石垣は聚楽第築城の際に整備された可能性がある。事実なら聚楽第の在りし日の姿を偲ぶ現存唯一の地上遺構となる。

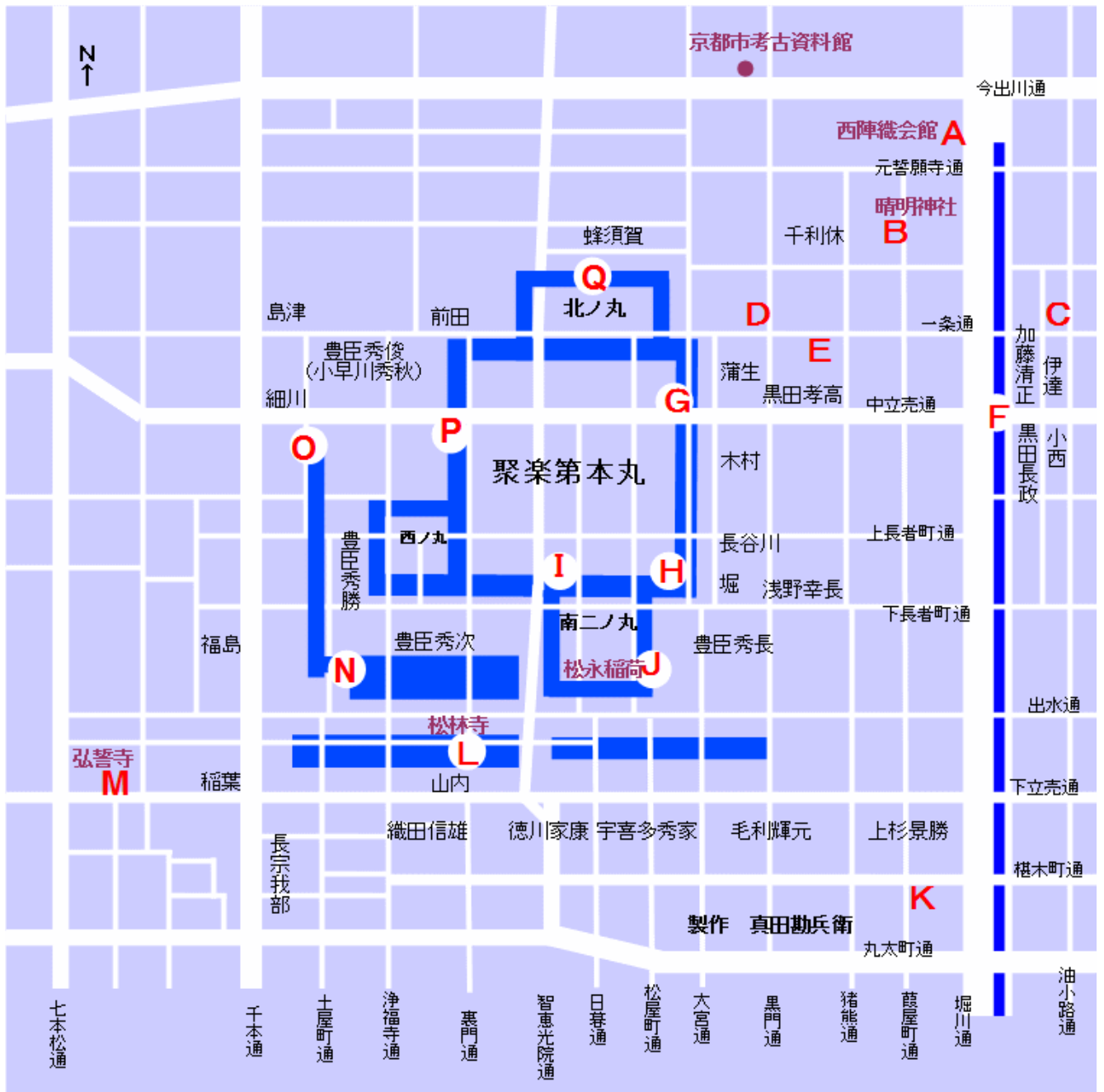
聚楽第があったとされる地域一帯は民家が密集していて発掘調査ができない。しかし1992年（平成4年）に、大宮中立売下ル和水町（わすいちょう）の西陣公共職業安定所（ハローワーク）の建て替え工事現場の地下から聚楽第本丸東堀跡が発見され、その中から桃山期の金箔瓦約600点が出土した。いずれも本丸側から投棄されたように層状に堆積していたので、聚楽第本丸の建築群に葺かれていた瓦と考えられ、2002年（平成14年）6月26日、国の重要文化財に指定された。

その後、1997年（平成9年）には京都市埋文調査センターの発掘調査により、一条通北側の松屋町西入ル鏡石町のマンション建築工事現場北端で東西に延びる底石列が二列検出された。この石列は京都図屏風などから聚楽第北之丸北堀南側の石垣のものと考えられる。

また2012年（平成24年）秋には京都府埋文研究センターの発掘調査により、智恵光通上長者町下ル東側の京都府警西陣待機宿舎敷地の南端で東西に延びる本丸南堀北側の石垣の基部が検出された（東西約32m）。現在は埋め戻され、地中に眠っている。

Wikipedia による





- A 村雲御所跡の碑 B 千利休居士聚楽屋敷跡の碑 C 諸侯屋敷・一条下り松遺跡の碑
D 聚楽城武家地上杉景勝屋敷跡の碑 E 黒田如水邸跡の碑
F 中立売橋 G 聚楽第址の石碑 H 梅雨の井 I 聚楽第本丸南堀石垣出土地 J 聚楽城鵲（かささぎ）橋旧跡の碑
K 此南聚楽城武家地直江兼続推定地の道標 L 聚楽第南外濠跡の碑 M 木村長門守重成公旧館地の碑 N 聚楽城武家地豊臣秀勝邸跡伝承地の碑
O 聚楽第外堀跡の落ち込み P 此付近聚楽第址の石碑 Q 聚楽第北ノ丸北堀跡石垣